

## 参加者の声①

### 近現代資料の活用とアーカイブの可能性

—牟田氏の報告を聞いて—

京都市歴史資料館 秋元 せき

国立公文書館アジア歴史資料センターの設立と運営にたずさわってこられた牟田昌平氏の報告は、同センターの特色や具体的な活動内容など、デジタルアーカイブの先進的な事例としてたいへん興味深い内容だった。

アジア歴史資料センターは国立公文書館の組織として2001年11月に設置され、国立公文書館・外務省外交史料館・防衛庁防衛研究所図書館の3館が所蔵する資料を電子データ化し、インターネット上で公開する事業を進めている。同センターのデジタルアーカイブは、研究者だけでなく、広く一般に情報を提供することを目的とし、「いつでも」「どこでも」「だれもが」利用できるという点で画期的なものといえる。

ただし、このデジタルアーカイブの基礎には、3館がそれぞれ所蔵資料をマイクロフィルム化し、フィルムからデジタル化するという行程があり、各所蔵機関が原資料の保存・管理や資料目録の作成などを担っているということも忘れてはならないだろう。こうした地道な作業が、デジタルアーカイブを水面下でささえている。また、アジア歴史資料センターのデジタルアーカイブを入口にして近現代資料に興味をもった利用者が関連する資料のマイクロフィルムを見たくなった場合など、所蔵機関での公開ともリンクして利用に供されている。そうした基盤があって、同センターはデジタルアーカイブを活動の中心にしているといえる。

同センターの設立の趣旨には、近現代における日本とアジア近隣諸国との関係にかかわる公文書その他の歴史資料を、内外に情報提供して知識を共有することなどが掲げられている。

今回の報告を聞いて、同センターの活動の中で注目したい点のひとつは、一

般にはなじみの薄い公文書を広く一般の利用者にみせることを柱に据えている点である。活字離れの傾向が進んでいるといわれるが、活字以上に読みにくくずし字で書かれた資料を一般の利用者にみせるためには様々な工夫が必要となる。他方、近年の文化施設では、多くの集客が見込まれる企画展、例えば、人気のある映画などをテーマにした展示を開催して、幅広い利用者を集めている。そうした中で、文字だけの記録史料を扱うことはあまりにも地味であり、一般の利用者を惹きつけるプレゼンテーションは口で言うほど容易ではない。

しかし、センターの実践例として、高校の夜間部で総合学習の教材として活用された事例が紹介されたように、デジタルアーカイブをとおして、自分の目で一次史料にふれることにより、生の資料をよむということの面白さと大切さを学ぶ機会が飛躍的に広がったことも事実である。また、地域の資料機関の場合にも、その地域の歴史資料の情報をわかりやすいかたちで提供すれば、学校教育や生涯学習など、利用活用の範囲はさらに広がっていく可能性をもっている。

現在、多くの資料保存機関が何らかのかたちでインターネットによる情報提供に着手し、今後の情報配信のあり方を模索しているところだが、子供向けのコンテンツの充実など、日本に先行して魅力的なホームページがつけられている諸外国の公文書館の例や、アジア歴史資料センターの取り組みは大いに参考になるだろう。

また、近隣の中国・韓国を含めた諸外国の公文書館に対し、日本における公文書館施設の整備の遅れが指摘されている。今後、国や都道府県、政令指定都市などにおける公文書館施設の整備・充実が急務の課題といえよう。

